

# 宿業の身が開く願心莊嚴の浄土

## 延 塚 知 道

はじめに

世親の『願生偈』は、「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安樂国」という信心の表明で始まり、「我作論說偈 願見弥陀仏 普共諸衆生 往生安樂国」という廻向門で閉じられる。曇鸞は「世尊我一心」の我を「流布の我」と註釈していることから、この帰敬偈の我と廻向門の我とは決して別なものとは見ていない。さらに「我作論說偈」の我の内実である「普共諸衆生」を問う「八番問答」の第一問答で曇鸞は、「大無量寿経」（以下『大経』）の本願成就文と『観無量寿経』（以下『観経』）の下々品の文を連引して、世親が表明する信心の主体である我を「一切外道凡夫人」と決定する。したがって曇鸞は、帰敬偈の信心の表明も当然、自力無効の凡夫に実現する本願成就の信心と読み取っているのである。

さらに曇鸞は、浄土の莊嚴功德について上巻では、「仏本この莊嚴清浄功德を起こしたまう所以は」とか「仏本何が故ぞこの莊嚴を起こしたまう」と、本願成就の信心に立って如来因位の願心を問ひ、下巻では、「此れ云何ぞ不思議なるや」と、果上の阿弥陀如来の不可思議力を讃嘆する。したがって浄土の莊嚴功德とは、世親の本願成就の信心

に感得されている本願力としての因力と尽十方無碍光如来の果力が実現する境界として説かれるのである。この本願成就の信心に体験されている境界を世親は二十九種の莊嚴功德として表現し、その浄土の莊嚴功德によつて一心願生の仏道に立たしめられたのである。

しかし親鸞は、この二十九種莊嚴の中で限られた莊嚴功德しか注目しない。ちょうど四十八願の中でわれわれの仏道を成就するために必要な真仮八願に注目すると同じように、われわれの仏道を根源的に支え成就する真実報土の莊嚴功德のみを取り挙げるのである。『入出二門偈』では、清淨功德、量功德、大義門功德、眷屬功德、不虛作住持功德であり、「証卷」では、妙声功德、主功德、眷屬功德、功德名を挙げてはいないが大義門功德の文、さらに清淨功德、その他に「行卷」では不虛作住持功德、功德名を挙げていないが大衆功德の文、「真仏土卷」では清淨功德、量功德、性功德、功德名を挙げていないが大義門功德の文、そして不虛作住持功德である。その他に和讃などにもいくつかの功德を取り挙げていますが、世親の二十九種莊嚴功德の中で、主として清淨功德、量功德、性功德、妙声功德、主功德、眷屬功德、大義門功德、大衆功德、不虛作住持功德、のほぼ九つの功德に注目するのが親鸞である。それを全て考へる紙面がないので、ここでは親鸞が特に大切にされた清淨功德と量功德について考へてみたい。

### 一 清淨功德釈

その二十九種の莊嚴功德の最初が「清淨功德」である。「觀彼世界相 勝過三界道」という偈文に曇鸞は、次のように註釈する。

此の二句は即ち是れ第一の事なり。名けて觀察莊嚴清淨功德成就と為す。此の清淨は是れ総相なり。仏本、此の莊嚴清淨功德を起こしたまう所以は、三界は是れ虚偽の相、是れ輪転の相、是れ无窮の相にして、蚘螻の循環するが如く、蚕繭の自ら縛る如くなり。哀れなるかな、衆生、此の三界顛倒の不清に締るるを見そなわして、衆生

を不虚偽の処に、不輪転の処に、不无窮の処に置いて畢竟安樂の大清淨処を得しめんと欲しめず。是の故に此の清淨莊嚴功德を起こしたまうなり。

〔聖全集〕第一卷・二八五頁

曇鸞はまず、この清淨功德を浄土の総相と位置づけて、法蔵菩薩の智慧に見抜かれたわれわれの相を、釈取虫の譬えと蚕繭自縛の譬えで註釈している。われわれ衆生の在り方を「釈取虫」||「輪転・无窮」、||「蚕繭自縛」||「虚偽」と、法蔵菩薩が見抜き、それを哀れんだからこそ浄土が建立されたと言説く。したがって、願心莊嚴の浄土とはわれわれの宿業の身の問題性を抜きにしてはあり得ない。われわれの宿業の身こそが浄土を建立させたのである。

ここでも明らかのように、仏の智慧で見抜いた宿業の身の問題は「輪転・无窮」と「虚偽」の二つに収斂される。「輪転・无窮」とは「五濁の世」の具体性を言うもので、人間は眞実を見失っているためにどこまでも流転して、人生の全てが空しく終わることを譬えている。現代の人間の課題に則して言えば、ニヒリズムの問題であろう。また「虚偽」は「穢」の具体性を言うもので、自力の執心によって全てのこと穢れていく人間の真相を言うものである。蚕が自分の身を守るために繭を作るが、最後の一本を巻き終わった時にすべてのものから遮断されて孤独になることを譬えたものである。現代の人間の課題に則して言えば、強烈な自我を主張して人間が孤立化していく問題である。

人間の生活の範疇では多種多様な問題性が錯綜しているように見えるけれども、仏の智慧に見抜かれた人間の問題性はニヒリズムの問題と孤独のふたつで言い当てられている。したがって、全ての人間の課題はこのふたつに収斂されると見なければ、われわれの仏道の課題にはならない、と思われる。充分に心すべきことである。

さて曇鸞は、下巻の清淨功德積で、次のように註釈する。

此れ云何が不思議なるや、凡夫人の煩惱成就せる有りて亦彼の浄土に生ずることを得れば、三界の繫業畢竟して牽かず、則ち是煩惱を断ぜずして涅槃分を得、焉ぞ思議すべきや。

〔聖全集〕第一卷・二八九頁

ここに説かれるように、浄土は畢竟涅槃界である。「信仏の因縁」（本願の成就）によって大乘正定聚に立つのであるが、願生浄土の仏道は実はそのまま、あらゆるものを涅槃に向かわせる大乘の至極であると言っているのである。その涅槃界が、浄土の本質を表す上巻の性功德積に、

この三界は皆是れ有漏なり、邪道の所生なり。長く大夢に寝て怖出を知ることなし、この故に大悲心を興したまう。願は我成仏せんに、无上の正見道を以て清浄の土を起こして三界を出でんと。性は是れ本の義なり、言うところは此の浄土は法性に随順して法本に乖かず、事『華嚴經』の宝王如来の性起の義に同じ。

（『聖全』第一卷・二八七頁）

と、「浄土は法性に随順し法本に乖かず」と説かれている。曇鸞はこのことを、下巻の浄入願心章でも次のように述べている。

此の三種の莊嚴成就は、本四十八願等の清浄願心の莊嚴したまう所なるに由りて、因浄なるが故に果浄なり。因无くして他の因の有るには非らざるなりと知る応しとなり。

（『聖全』第一卷・二二六頁）

と、浄土は法蔵菩薩の願心によつて莊嚴された境界であることを述べている。しかしこのような言い方は、浄土の性といひ法蔵菩薩の願心莊嚴といひ、いわゆる浄土教の範疇内の言い方であろう。願生の仏道が「大乘の至極」であることを言うためには、浄土教の枠を破つて大乘仏教の土俵で証明する必要がある。

だから曇鸞は、先の浄土の莊嚴を大乘仏教の教理の範疇に返して、次のように言う。

上の国土の莊嚴十七句と、如来の莊嚴八句と、菩薩の莊嚴四句を広と為す。入一法句を略と為るなり。何の故にか広略相入を示現したまうとなれば、諸仏・菩薩に二種の法身有ます。一には法性法身、二には方便法身なり。

法性法身に由りて方便法身を生ず。方便法身に由りて法性法身を出す。此の二の法身は、異にして分つべからず、一にして同ずべからず。是の故に広略相入して、統ずるに法の名を以てす。菩薩、若し広略相入を知らずば、則

ち自利利他するに能わじ。

(同前)

曇鸞は、法蔵菩薩が浄土を建立したのは法性法身を根拠にしているという。つまり願心莊嚴の浄土が、法性法身(略)と方便法身(広)という大乘の仏の二身論の最も具体的な姿であることを言おうとするのである。そのようにして曇鸞は、願生浄土の仏道が浄土教という特殊な仏道ではなくて、畢竟涅槃(法性)に向かう仏道であり、そこに具体的な大乘仏教が実現する事を証明しようとしたのである。

われわれが本願の名号に帰するという体験は、虚妄の身が転じられて浄土が開かれ、その浄土に解放されることである。その子細は曇鸞の眞実功德釈につまびらかである。

眞実功德相とは、二種の功德有り。

一には、有漏の心より生じて、法性に順ぜず。所謂凡夫人天の諸善、人天の果報、若しは因、若しは果、皆是れ顛倒、皆是れ虚偽なり。是の故に不実の功德と名づく。

二には、菩薩智慧清浄の業より起りて、仏事を莊嚴す。法性に依つて清浄の相に入る。是の法顛倒せず、虚偽ならず、名づけて眞実功德と爲す。云何が顛倒せざる。法性に依つて二諦に順ずるが故に。云何が虚偽ならざる。衆生を摂して畢竟浄に入らしむるが故に。

(『聖全』第一卷・二八四頁)

ここでは眞実功德相が、二十九種に莊嚴された浄土の風光としてだけでなく、不実功德と眞実功德という相對する二つの功德を内に包んでいる。それはわれわれが名号に帰する時の凡夫の目覚め(不実功德)を示すとともに、「衆生を摂して畢竟浄に入らしむる」という浄土の働き(眞実功德)の二つを内に包んで浄土の二十九種莊嚴が説かれている。だから機の自覚とか自力無効の自覚といわれる不実の目覚めは、人間の能力によって自己の実相に目覚めるといふことではない。そうではなくてすでに述べたように、法蔵菩薩の智慧によって見抜かれた宿業の身が、如来に見抜かれた通りどこも間違ひはないと決定されることである。そこに浄土の眞実功德相の方が働く機へと転ずる。要するに、

称名念仏によつて凡夫の身のままで浄土の働きを受けるものへと転じられるのである。

したがって『論註』では、此土の讃嘆門の「破闇満願」と彼土の不虛作住持功德の「見仏」とが重なつて説かれていて、凡夫の身ではあつてもその信心は浄土の阿弥陀如来の見仏にまで通じている。つまり他力の一心は、「深広無涯底の如来の智慧海」（涅槃界）にまで通達している。それを曇鸞は、先の方便法身と法性法身の仏の二身論を通して明らかにすると同時に、「煩惱を断ぜずして涅槃分を得」と表明するのである。この辺に親鸞が「称無碍光如来名」を「大行」という独自の行の了解を顕揚していく根拠がある。要するに「帰命尽十方無碍光如来」という体験は、凡夫のままて涅槃に触れるのである。

その体験を踏まえて親鸞は、

法身は、いろもなし、かたちもまします。しかれば、こころもおよばれず。ことばもたえたり。この一如よりかたちをあらわして、方便法身ともうす御すがたをしめして、法蔵比丘となりのたまいて、不可思議の大誓願をおこして、あらわれたまう御かたちをば、世親菩薩は、尽十方無碍光如来となづけたてまつりたまえり。

（『親全』第三卷・和文篇・二七一頁）

と、言う。これは先の曇鸞の了解を踏まえて、大乘の二種法身論と浄土教の願心莊嚴とを一つにして解説しているのであるが、しかし単純に方便法身と法性法身の説明をしているわけではない。親鸞は、「いろもなし、かたちもまします」ぬ法性法身を、法蔵菩薩として立ち上がらせたのは、「そくばくの業を持ちける身」||「親鸞一人」であるという深い謝念を述べているのである。

本来大乘の仏道において、例えば『大智度論』には、

諸法の実相は、常住にして不動なり。

と言われたり、

（『大正』二十五・二九八頁・下）

一切法、本より已来、不來不去、無動無発、法性常住。

(『大正』二十五・四二頁・上)

と説かれて、真如は動かない。その真如を大悲の發動として立ち上がらせるのは、大悲せざるを得ないわれわれの迷いの身である。

先の清浄功德積でも明らかなように、「そくばくの業をもちける身」の問題性を、孤独と空過と見抜いたから「いりもなし、かたちもましまさぬ」法性法身から法蔵菩薩として形を表して、浄土を建立したのである。法蔵菩薩を立ち上がらせたものは、どこまでもわれわれの宿業の身が持つ問題性である。したがって四十八願にしろ浄土の莊嚴功德にしろ、われわれの身の問題を抜きにしてはあり得ない。われわれの身の問題の外に浄土があると考えたり、どこかに建てられた世界と考えることはできても、それは眞実報土ではない。親鸞は眞実の報土を、

謹んで眞仏土を案ずれば、仏はすなわちこれ不可思議光如来なり、土はまたこれ無量光明土なり。しかればすなわち大悲の誓願に酬報するがゆえに、眞の報仏土と曰うなり。すでにして願います、すなわち光明・寿命の願これなり。

(『親全』第一卷・二二七頁)

と、無量光明土という。それは浄土があつて光を放っているのではない。われわれの無明を破る智慧の光、それ自体が浄土である。それと同じように、本願があつて智慧の光を放っているのではない。無明が破られた智慧の光、それ自体に本願を感得するのである。だからわれわれの宿業の身の問題が智慧の光に照らされ、転じられていくのであるから、浄土といつても二十九種莊嚴があるわけではなく、確かにあるのはわれわれの眞実に背く身の問題性である。如来に背く宿業の身が持つ問題性こそが、法蔵菩薩をして浄土の莊嚴功德を開かせたのである。その宿業の身の問題性を「不実の功德」と自覚させ、それを転じて「衆生を摂して畢竟浄に入らしむる」のが涅槃の働きである。先の親鸞の解説は、涅槃から開かれる浄土こそ、最も具体的な大乘の仏道を成就してくれたものという、大いなる感動を表明しているのである。

私は、この涅槃と直結する感動が、親鸞に「真仏土巻」を開かせたのであると思う。二乗であろうと化土の往生であるうと、当の本人にとつて真実証であると思ひ込んでいるところに仏道の最大の課題がある。したがって、前の教・行・信・証が浄土の真宗という真実の仏道に成るか否かは、その証果が大涅槃に直結するかしないかである。そこに、真仏土を開顕しなければならぬ最大の理由がある。しかも、証が真実証であるかそうでないかは、人間の方から証明することは不可能である。それは、法性法身↓方便法身↓称無碍光如来名と大涅槃からわれわれへという方向を持つ限り、法性法身の方から批判され証明される以外にはあり得ない。具体的にいえば真仏土を基点として、浄土は法性法身より性起した願心莊嚴の浄土でなければならぬし、願生の仏道は如来の方から開かれた二種の廻向によつて成り立つ仏道でなければならない。要するに、われわれの仏道の全てが真実の方から開示されたものでなくてはならない。その、涅槃の方から開かれる仏道を表す基点が「真仏土巻」に説かれている。したがって「真仏土巻」は、『教行信証』全体が、浄土の真宗になるか成らないかの分かれ目となる巻であり、『教行信証』の扇の要であると言つても過言ではなからう。よく言われるように、本当は「証巻」で充分なのだけれども、親鸞が敢えて「真仏土巻」を開いた、というような通念的理解では不十分であると思われる。

さて、清浄功德が、「取取虫」Ⅱ「輪転・无窮」(濁)、「蚕繭自縛」Ⅱ「虚偽」(穢)という人間の問題性を徹底して自覚せしめ、「濁↓清・穢↓浄」と、濁穢というわれわれの在り方を清浄に転じて、畢竟浄に入らしむる働きこそ涅槃界であると、明らかにしている。したがって「取取虫」は、永遠の流転・空過を表すのであるが、それを転じていくのが浄土であるならば、「観仏本願力 遇無空過者」と詠われる仏莊嚴の不虚作住持功德、さらに国土莊嚴でいへば主功德へと展開していくのである。また、「蚕繭自縛」は孤独を転じる世界であるから、「如来浄華衆 正覚花化生」と詠われる国土莊嚴の眷属功德、大義門功德へ、さらに仏莊嚴で言へば衆功德へと展開していくのである。要するにこの清浄功德から主功德、不虚作住持功德が展開し、さらに、眷属功德、大義門功德、衆功德へと展開していく。



そこに、清浄功德が総相である所以がある。

## 二 量功德釈

この清浄功德について今一つ付言しておきたい。曇鸞はこの清浄功德を浄土の総相とするが、親鸞の場合は、この清浄功德と次の量功德とを合わせて浄土の総相とする。「入出二門偈」では、

かの世界を観ずるに（清浄功德） 辺際なし。究竟せること広大にして虚空のごとし。（量功德）

（『親全』第二卷・漢文篇・一一二頁）

と、清浄功德と量功德を一連の偈文として掲げ、さらに『尊号真像銘文』では、

「親彼世界相 勝過三界道」というは、かの安楽世界をみそなわすにはとりきわなきこと虚空のごとし。ひろくおおきなること虚空のごとしとたとえたるなり。

（『親全』第三卷・和文篇・八八頁）

と、清浄功德の偈文に量功德の解説を付している。このように清浄功德・量功德を一連の偈文として連引するのは、「帰命無量寿如来 南無不可思議光」という親鸞の宗教体験に起因して、光明無量の願・寿命無量の願を「真仏土巻」の標拳に掲げることと別のことではなからう。如来の光明無量によつて、清浄功德に説かれるように、われわれの空過と孤独の根源的な原因が照らし出され、徹底して無明存在を知らされる。同時に如来の寿命無量によつて、量功德に説かれるように、われわれの根源的な志願が満たされていく。つまりわれわれの回心の体験、すなわち名号に帰するという体験に則して言えば、讚嘆門で曇鸞が言うように「破闇満願」という大いなる感動には、如来の本願が二つの大きな契機として働く。それが光明無量の願（清浄功德）・寿命無量の願（量功德）である。だから親鸞は清浄功德と量功德を一連の偈文として、浄土の総相と見るのであろう。

その寿命無量を表す量功德には、

仏本此の莊嚴量功德を起こしたまう所以は、三界を見そなわすに、陝・小・墜・陁・陪・階にして或は宮觀迫進なり。或は土田逼隘なり。或は志求路促り、或は山河隔ち障う、或は国界分部せり。此の如き等の種々の拳急の事有り。是の故に菩薩此の莊嚴量功德の願を興したまえり。願わくは、我が国土虚空の如く広大无際ならん、と。

〔聖全〕第一卷・二六六頁

と、浄土の量が、広大無際の国土として説かれている。量というのだから他の説き方をしてもしかるべきであるが、われわれの生きる大地として説かれている。仏教は心の支えなどという通念があるが、そんな通念を破つて、浄土が一切衆生の立脚地として説かれる。なぜなら、われわれの心それ自体の無明性を問題にしているのが仏教だからである。つまり浄土が心の拠り所などではなくて、あらゆるものが共に生きていける根拠として説かれるのである。

さらに、その国土が狭く、小さく、窪んだところや反対に盛り上がったところがあり、宮殿の高殿は狭く窮屈で、土地や田畑は狭苦しく、国境に隔てられて行くことができない、と説かれる。要するに、この世界はわれわれの思うようにならないから、法蔵菩薩が浄土を建立したというのである。それならば浄土は、われわれの思い通りになる世界として説かれているかといえ、決してそうではない。われわれは思うようにならない事があると、何とかして思うようにしたい、としか考えつかない。そこに人間の愚かさがある。山を削り平らにして様々なことに利用し、川を広くして灌漑し、道路を広くしてわれわれの思うように大地を変えてきた。しかしその結果、地球の温暖化を初め様々な環境問題を引き起こしている。たとえ思うようになったとしても、そのことがさらに迷いを重ねているだけである。法蔵菩薩の智慧は、われわれの思うようにならない事を契機にして、「虚空の如く広大无際」なる無量の国土に目覚めよと言う。つまり思うようにならないことを思うようにするのではなく、思うようにならないことを本当に引き受けていける真実を人間は求めている、と教える。だから、「広大无際」なる無量寿に目覚めて生きることこそ、一切衆生の根源的な志願が満たされると説くのである。世間の中に、われわれの根源的な満足などどこにも

ないが、われわれの思つてもいない「廣大无際」なる無量寿にこそ絶対の満足があると説いている。ここに世間道と仏道の、決定的な質の違いがある。「勝過三界道」と説かれる清浄功德での目覚めが、この量功德で全うされていくから、この二つの功德を親鸞は総相としたのであろう。

われわれの志願が全うされていくことを、量功德では次のように説く。

成就は、言うところは、十方衆生の往生せん者、若くは已に生じ、若くは今に生じ、若くは当に生ぜん、无量无边なりと雖も、畢竟じて常に虚空の如く、廣大にして際なくして、終に満つる時无からん。

（『聖全』第一卷・二八七頁）

ここでは已・今・当を貫いて、生まれてくる者が無量にいたとしても、浄土は虚空のようであるという。浄土は単なる場所としてあるだけではなくて、われわれが本願の名号に帰した自覚的世界である。だから往生人がどれだけ生まれようと、生まれる者が浄土を開くのみならず浄土は虚空のようだと、言うのである。

下巻の觀察体相章に、願生の生について曇鸞が解説しているところを見てみよう。

建の章に、「歸命無碍光如来願生安樂国」と言えり。此の中に疑有り。疑いて言うところは、生は有の本、衆累の元為り。生を棄てて生を願ず、生何ぞ尽く可きや。

此の疑を釈せん為に、是の故に彼の浄土の莊嚴功德成就を觀ず。明けし、彼の浄土は是れ阿弥陀如来の清浄本願の無生の生なり、三有虚妄の生の如きには非ざるなり。

何を以て之を言うとならば、夫れ法性清浄にして畢竟無生なり。生と云うは是れ得生の者の情ならくのみと。生苟に无生なり、生何ぞ尽くる所あらん。

（『聖全』第一卷・二二七頁）

ここで曇鸞が言うように、願生の生は「无生の生」であり、浄土の生は「得生の情」である。「三有虚妄」の実体的な生を言うのではなくて、「生」といつても自覚的な「転依」を言うのである。親鸞は、曇鸞和讃の「无生の生」

の左訓に「六道の生を離れたる生なり。六道の生に生まるること、眞実信心の人は無き故に、無生の生という」(『親全』第二卷・和讃篇・九九頁)と記して、六道の迷いを超えた浄土の生と言う。「尽十方無碍光如来」に徹底して無明を知らされ、それまでの自力を中心とする世界から本願の住持する世界へ世界全体が転ずるのだから、実際に生まれるということではないにしても、浄土に生まれるとしか表現のしようがないのである。願生の生とは、大乘の転依をいうのであって、「得生者の情」なのだから、どれだけ生まれたとしても、浄土が一杯にならないのは当然である。

そのような自覚の世界である浄土が、この量功德では、已・今・当を貫く無量寿の世界として誓われるのはなぜであるか。すでに「眞実功德相」の所で一言したように、われわれに徹底して不実の功德を自覚せしめ、それを転じて「畢竟浄に入らしむる」のが浄土の働きである。その不実の自覚を、善導の機の深信で言えば、次のようになる。

一には決定して深く自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し常に流転して、出離の縁有ること無し。

(『聖全』第一卷・五二四頁)

このわれわれの目覚めは、「自身は現に」と今のわれわれの身に開かれる自覚であるが、その開かれた自覚は、人類が始まる以前の過去から流転し続けてきた身であり、またこれから先、永遠の未来に渡って救われるはずのない身であるという目覚めである。「決定して深く自身は現に是罪惡生死の凡夫」||「今」、「曠劫より已来、常に没し常に流転して」||「已」、「出離の縁有ること無し」||「当」、このように、已・今・当を貫いてある宿業の身を、転じる働きこそ浄土である。だから本願の名号に帰したこの身には、「如来すでに発願して」と、われわれの身の過去よりも過去に帰って法蔵菩薩の発願を仰ぎ、その一方で、「なごりおしくおもえども、娑婆の縁つきて、ちからなくしておわるときに、かの土へはまいるべきなり」と、純粹未来の浄土を感得する。もちろんこの過去と未来は、本願の信に感得されている「自身は現に」という今の自覚だから、二つの時間は二つの契機という意味で、異相ではあっても異時ではない。要するに、凡夫のまままで救いに転じられたという感動(今)は、転じた仏の働きを、法蔵菩薩の発願

(已)と尽十方無碍光如来(当)という二つの相への大いなる謝念として語る他にはないのである。

このようにわれわれを転じていく浄土の働きを曇鸞は、

此の中の仏土不可思議に二種の力有り。一には業力、謂わく、法蔵菩薩の出世の善根と、大願業力との所成なり。二には正覚の阿弥陀法王善住持力に撰せられたり。

此の不可思議は下の十七種の如し。一一の相、皆不可思議なり。文に至りて当に釈すべし。

(『聖全』第一卷・三・七頁)

と表す。それは、自らを転じた浄土を、「法蔵菩薩の出世の善根」と「阿弥陀法王善住持力」というふたつの働きとして押さえ、その感動と謝念とを述べている。「自身は現に是れ罪悪生死の凡夫」の以前よりも以前の法蔵菩薩の発願と、未来よりも未来の阿弥陀如来の浄土を感得するのだから、浄土は已・今・当を貫く無量寿として莊嚴されるのである。

さらにこの量功德では「廣大无際」が、国境というような大地を遮る際がないと説かれる。既に述べたように自覚的な世界が浄土なのだから、一人一人の往生人が、全て浄土の中心であり浄土を背負う責任がある。上巻の量功德には、最後に維摩の方丈の譬えが説かれている。『註維摩詰経』巻第六に出ている譬えであるが、維摩の神通力によって狭い方丈に三万二千人もの菩薩を招き入れたという。しかし、維摩の譬えは狭い方丈を神通力によって広くしたのであって、浄土はもともと広いものを広いというのだから、維摩がそれに勝る道理はないのである。浄土は個人の神通力によって開かれたものではない。それぞれの立脚地となっている法の世界を浄土として釈尊が説いたものだから、それに目覚めることができれば、そこが浄土の中心であり、その浄土を背負う使命が生まれるのである。要するに「一仏が主領」する世界ではなくて、「尽十方無碍光如来」というもともと広い法の世界に帰命するのだから、たくさん諸仏を生み出す大乘の世界として説かれるのである。

下巻ではそれが、

彼の中の衆生、此の如きの量の中に住して、志願広大にして、亦虚空の如くして限量有ること无けん。彼の国土の量、能く衆生の心行の量を成ず。何ぞ思議す可きや。

〔『聖全』第一卷・三二九頁〕

と、浄土に生まれた者の広大な志願として成就する。この広大な志願の具体性は、主功德や、十七種の国土莊嚴の最後に説かれる一切所求満足功德に展開されているように思われる。